

た。ここで借りた金を、利息をつけて返すという約束をしておいた言葉を信じて家を出たのです。余り暑くならないうちに友だちにあつて話をきめようと思ひ途中いそいで山道を通つて、六杯内に着きました。約束の時がやつて来たのに友だちの姿は見えません。嘉作は友だちが何か用が出来て少し遅れたのかなあと、その辺の草むらに腰をおろして待つていました。何時間たつても、友だちはやつて来ませんでした。嘉作は、待ちくたびれて友だちの家に行こうかと考えましたが、友だちは嘉作からお金を借りる時、家人には内密に借りるのだから、だれにも話さないでくれといわれたのを思ひ出して、しんぼう強くもう少し待つて見ようと思つて、草むらに寝ころんで空を見上げていました。カラスが気味悪く嘉作の方に向つてやかましく鳴きさわいでいるのです。

遠くの方で何だかさわがしくなつて来たようでした。一匹の犬が、急に嘉作にとびついて来ました。その時友だちはほかに知らない若い男をつれて鉄砲をかついでやつて来たのです。そして、杉木立の下に立ち上つて嘉作は友だちらの姿をにらみつけるように見つめていました。友だちは肩から鉄砲をおろして、弾丸をこめて嘉作の方に向けていたのです。「嘉作よ!!この鉄砲の弾丸を取つてみる!!うまく取れたら、金は倍にして返してやるよ……」とあざけるようになってゐる。犬は大きくほえかかつて、嘉作のまわりを暴れ回つてゐる。嘉作は友だちに馬鹿にされたことに初めて気付きました。そしてくちびるをかみしめて弾丸を握る姿勢をとりました。

「ズドン!!」大きな音を立てて友だちの鉄砲から火の噴くのが見えました。「ピシャリ……」音を流しながら嘉作の手に銃弾が一発握りしめられました。ところが間一髪またまた「ズドン!!」という音と共に一発の